

氏名： 小村 陽平

実施国： ニジェール共和国

調査研究

活動名称

ニジェール東部における砂漠化対処と地域開発支援に関する研究

実施期間

2011 年 4 月 7 日～2012 年 3 月 31 日

(1) 活動内容

活動は、以下の 2 つである。①外部導入技術である「耕地内休閒システム (Ikazaki et al. 2011)」の普及状況調査、②サヘル地域の村落における「危機の年」の認識とその対処行動に関する調査である。①では 2010 年に調査地に普及された技術の住民による継続性や新規に技術を実践し始めた住民の存在について調査した。また、技術実施上の問題点や技術に関する住民の声を聞く調査をした。そして、聞き取り調査だけでなく、技術を実施した畑で技術効果が現れているかについての視察も行った。②では、農耕民と牧畜民が「危機の年 (干ばつなどにより食料不足に陥った年)」をどれほど認識しており、「危機の年」の際にどのような対処行動に出たかについて調査をした。調査は①と同じく、質問表を用いた聞き取り調査を中心に、住民との会話や参与観察を行った。対象村落は農耕民の 2 村落と牧畜民の 1 村落である。なお、調査の結果について学会発表し、論文を投稿し現在審査中である。



農業局員による技術紹介



バンド設置方法を説明するアシスタント

(2) 活動を振り返ってうまくいった点、反省点

ニジェールは暑さ、乾燥、インフラの未整備、食事などの面において外部者にとって生活することが厳しい国である。隊員時代も何度か体調を崩すことがあったが、今回の調査と渡航中においても何度か体調を崩してしまいニジェールで生活することの厳しさを改めて感じた。

調査は、本研究費に利用して雇用したアシスタントの活躍や十分な交通費により、予定通りに進めることができた。しかし、調査を行うことは初めてのことであり、何度も二度手間を行ってしまったり、聞き方の角度を変えるべき必要性を帰国後に調査結果をまとめることにより気づいた。幸いなことに、調査渡航が2回に分けられていたため、1回目の渡航で聞き漏らしたことや、聞き取りが不十分であった点は2回目の渡航で追加調査をすることができた。

(3) 活動を通じて、国際貢献、国際交流ができたと思う点

まず、①の調査については技術開発者や技術普及者である JICA 草の根技術プロジェクトにレポートや写真資料を提出することにより、調査結果をフィードバックしたいと考えている。②の調査結果については、5月13日にシステム農学会において研究発表を行い、優秀発表賞を受賞することができた。また、本研究についての論文を6月15日に投稿しており、現在学会にて査読中である。以上のように、JICA 草の根技術プロジェクトへの報告や学会での発表や学術論文の発表により国際貢献につなげていきたいと考えている。

次に国際交流であるが、隊員時代と同じ街・村落で研究を行うことにより、更に多くの現地の方々と交流をすることができ、知り合いも増えた。彼らとの交流を通じて調査についても深めることができ、異文化理解についても促進することができたと感じている。私だけでなく、地域住民にとっても私と交流をしたことが国際交流につながっていることを願う。

(4) 今回の事業をふまえ今後の計画

「危機の年」の認識と対処行動についての調査から、農耕民と牧畜民の両者において出稼ぎが重要な対処行動となっていることがわかった。また、近年は収穫では世帯の食料を賄えないような状況にあり、出稼ぎに行くことが日常化しつつある。しかし、ニジェールの農耕民ハウサ族の出稼ぎに着目した先行研究は多くはない。そこで、今後は「サヘル地域の村落における出稼ぎの実態－ニジェール南部の農耕民ハウサの村落を事例に－」というタイトルでの研究を行うことを計画している。具体的には、農耕民ハウサの出稼ぎ先、頻度、期間、収入などについて質問表を用いた聞き取り調査を行い、それをまとめていく。現地調査は2012年6月～7月と2012年11月～12月の2回を予定している。また、今後の研究においても、学会発表や学術論文の投稿を行うことを考えている。